

第3回 「南三陸町まちづくりワークショップ」

○日時：平成18年6月1日（木）19:00～21:00

○場所：南三陸町役場行政第2庁舎2階会議室

○次第：1. 開会

2. ワークショップ

テーマ1 地域の環境と暮らし・なりわいのあり方について

前回に引き続き、委員をA・B2つのグループに分け、同一テーマを別々に話し合いました。

<Aグループ>

Aグループ…後藤一磨・阿部長喜・佐藤洋・佐藤すみ子・佐藤美和・高橋昭夫・山内完二

第2回ワークショップ終了後、自主会合を開催した。その際、以下のような意見が出された。第3回ワークショップでは自主会合での議論内容を中心に掘り下げを行った。

★目指すべきもの、理想とする町の姿

1. 地域循環型のまち

- ・牡蠣殻堆肥づくり（遠藤組）、糞と牛肥の交換による堆肥づくり（入谷）生ごみを使ったボカシづくりなどに取り組む人々が出てきているが、町内ではあまり知られていない。入手するのが難しい。これあの人々が点の存在であり、相互のネットワークが形成されていない。点から線へ、面へと拡げていく必要がある。
- ・南三陸町が目指す循環型の町ということの究極の目標は、山と海の間での自然循環システムの再構築（横浜先生談）に据えることが必要。この目標に向けて、今から何を考えるのか、残すのかといった議論と、わかりやすい行動モデルを創り出し、実践活動を展開していく必要がある。
- ・ごみ問題についても、まずは個人の意識改革と町の規制の双方を同時に進めることが必要。都市部ではごみの有料化、詳細な分別もあたり前。この点では南三陸町は遅れている。生ごみの堆肥化に個人が取り組むには、いろいろと技術的に難しい点もあるが、学習すれば大丈夫。集落ごとに詳しいお年寄りなどを堆肥づくり名人として、指導にあたってもらうような体制をつくり、意識ある住民から参加していくことで、輪を拡げていくことも可能である。

2. 人材を活用し、コーディネートできるまち

1. に関連して

- ・いろいろな意識を持って、実践活動をはじめている人々がいる。ただ、これらの人々が集まる機会が少ない。南三陸町の気風として、個人という資格で、何か行動を起こすことには抵抗を感じる人が少なくない（いろいろなシガラミから躊躇

する)。ここで期待するのが町の役割で、戦略的にいろいろな能力を有する町民を集め（一本釣り、公募 etc）、このワークショップのように、一緒に考える場を設けることが必要である（本町では、都市型のアソシエーション型コミュニティは、自然発生的には生まれにくい）。

『やってみせ、言って聞かせてさせてみて、誉めてやらねば人は動かじ』（by：山本五十六）

3. エコライフを中心とした「殖産」のまち

- ・未来の世代に引き継がなければならない自然環境という南三陸町の財産と、今ここに暮らす私たちの幸せを両立させていくためには、町民一人ひとり、そして町で生業をいとなむ企業、事業者も、土・水・空気・森などの自然環境をいかに持続的に活用していくかという発想から、そのあり方を見直し、将来像を展望していく必要がある。

例えば、農業については、慣行農法から有機農法に意識的に切り替えることで、農家本人が農薬を使うことでの自身への化学物質の影響がなくなる。加えて、農地の生き物を育む力が強くなる。堆肥などの需要が生まれ、これが町内の生ごみ堆肥化、下水汚泥の堆肥化といった物質循環の輪を生み出すエンジンになる。安心・安全な食材は、町民がまずそれを享受する。そのために、商業者と農業者のつながりが生まれる。加えて、観光等で訪れる人にもお裾分けすることで、商業、民宿業の人たちとのつながりを生み出す。漁業においては、志津川湾という閉鎖性内湾の持続的活用が最大の課題となるが、漁業者の意識も、里で暮らす人々の努力があつてこそ、その変革を求める大きな力となる。

4. 女性と高齢者も自由に働けるまち

- ・少子・高齢化が進む中で、地域社会・経済の担い手としての女性と高齢者の活躍の場はもっと広がる（拡がるべき）。女性が働きやすくなるためには、子育て支援環境の充実が重要である。高齢者の働く場としては、1次産業での活躍に加え、お年寄り一人ひとりが持つ、昔の知恵や技を今に活かすという発想から、体験学習観光サービスの開発と講師等での活躍などを用意していくことが必要である。

5. 生業の中に「モラル」を確立できるまち

- ・基本的には経済的な物差しの他に、もう一つの物差しを町民が共有できるかということになる。例えば、「変わらないこと」「変わってはいけないこと」、「ふるさとの価値」など。

○「モッテネエ（モッタイナイ）」という価値観：かつての暮らしの中ではしばしば言われたこと。今はあまり語られなくなった。農業、漁業、商業、工業、観光サービス業などの経済活動を「モッテネエ」という観点からみたら、どのようなものがあるか。これを今まで見えなかった地域資源として再評価することで、①、③、④のまちづくりに繋がる行動モデルを生み出すことができるので

はないか。

○「メンドミ」と「オケシ」の文化：経済的に余力のある者、社会的に地位のある者、時間的に余裕のある者、情報や知識に優れる者が、地域社会や隣人のために世話をやくこと、南三陸町では、そのような人を「メンドミ」の良い人と呼んでいる。今、この「メンドミ」の良い人はどのくらい居るだろうか？自分自身は「メンドミ」をしているだろうか。また、「メンドミ」をされた人は、物的にあるいは心で「オケシ」をすることを決して忘れなかった。

○お金だけではない「メンドミ」－「オケシ」関係は、今、どのくらい残されているか。この関係を現在に再構築するとしたら、どのようなものになるのか。これが生業の中の「モラル」の一つになるのではないか。

6. 「自立」と「自律」のまち

→ここまでは、議論が時間切れで進まなかった。

→解釈としては、①～⑤をまとめるもっとも大きな理念として、位置付けることができる。と考える。

<Bグループ>

Bグループ…佐藤かつよ・梶原仁一・兼田茂・昆野慶弥・太齋京子・元木静雄・渡辺由紀子

今回は、①生活環境・なりわいに関わる重点課題の整理、②まちづくりの基本方向の2点について、主に検討を行った。

★生活環境・なりわいにかかる重点課題の確認

第2回ワークショップの検討内容を踏まえつつ、「生活環境・なりわい」並びに「防災・生活基盤」にかかる重点課題について、以下のとおり洗い出し・確認を行った。

1. 自然環境の保全・保護

- ・海・山の恵まれた自然環境は南三陸町最大の資源、かつ、「南三陸町らしさ」を形成する要素であり、今後の利活用が課題である。
- ・現状ではこれら資源は身近なため、町民がその価値に気づいていない。
- ・観光面の交流人口など「外からの目」により、その価値を町民自らがその価値を再認識する必要がある。

2. 良好なまちなみや景観形成

- ・自然環境と相まって、快適で魅力的なまちを創出・保全していくためには、まちなみや景観への配慮が必要である。
- ・まちなみ・景観形成にあたっては、「どんなまち」「どんな中心市街地」をつくっていくかという「ランドデザイン」が必要である。
- ・それに基づき、「南三陸町らしさ」をイメージできる一環した景観づくり・環境づく

りが大切である。

3. ゴミ収集・処理（ポイ捨て、不法投棄）

- ・ポイ捨て、不法投棄は、南三陸町の最大の資源である自然環境の破壊、景観の阻害につながるものであり、良好な環境の形成・保全のためにも取り組むべき課題である。
- ・商工団地周辺では商工団地関係者など地元住民によるポイ捨てがほとんどである。企業教育をはじめ、町ぐるみ運動として取り組み、浸透させていくことが必要。それによって、意識が醸成される。

4. 良好な交通基盤の確保・整備（町内外）

- ・外に向かって「誇れるまち」も、その土台は「町民自らが安心した暮らしを送れるまち」であることが大切である。その意味において、交通基盤の充実は、町民の暮らし、まちづくり全般の活性化において重要な役割を果たすと考える。
- ・深刻化する高齢化（運転できる人も減る）、また、近々の課題では宮城交通の撤退など、町民の生活を支える日常の足の不便さが、今後、大きな課題となってくる。
- ・高齢社会に備えると、老人が歩きやすい、買い物しやすい、段差がない、住居が街中に確保できるなど、多様な観点から対応する必要があり、この中で商店街との関係も考える必要があり、これら大枠の思想が大切である。
- ・日常生活上の交通の便がよければ街中に人が集まる。現実には中心部に行けないから購入できないという状況もある。
- ・街中を元気にするには車社会に対応できる道幅、駐車スペースの確保などを含めて考えるべきである。
- ・例えばワンコインバスやコミュニティバス、あるいはスクールバスの有効活用などにより充足できる環境を整えば便利になる（どこでも止まってくれるバスがあれば便利）。
- ・長距離移動の場合、隣町バスとのダイヤを連携する方法もある（路線を延ばす、ダイヤ連携など）。

5. 賑わいのある中心市街地の形成

- ・商業・観光の連携で街中に人を呼び寄せる必要がある。
- ・町民の購買意欲はあるが、消費者を満足させる場所が少なくなっている。例えば、産業市のような賑わいが日常的に街中にあり、「そこに行けば何かがある」「楽しめる」という仕組みづくりができないか。

6. 観光（一次産業、商業、福祉施策等との連携の中で位置づけ）

- ・一口に「観光振興」ではなく、町民が共有できる「らしさ」「ランドデザイン」といった「統一理念・思想」が必要である。
- ・好きなところに行くと疲れが飛ぶように、そんなもてなしのできる南三陸町民の笑顔・心を持ちたい。

- ・「心も体もひとやすみ・・・」（兼田委員提案）を商店街、観光業等との連携により活用するなど、関係団体等の一体的な取り組みが必要。
- ・現在、街中に観光案内所がない。商店街の空店舗などにあれば、街中の活性化につながるのではないか。

7. 農林漁業の振興（地元産業の振興）

- ・企業誘致の時代ではない。内発的な産業振興こそが地域活性化につながるのではないか。
- ・観光で外から来る人の消費よりも、地元に住み続ける（土着する）ことが南三陸町の活性化につながる（定住者を確保することが活力になる）という意味において、雇用の確保は重要（例えばブランド開発など産業間連携により創出）である。
- ・農・林・漁・商・工を切り離して考えるべきではない。産業間で相互に密接に連携し合った取り組みが重要（漁協、農協、商工会などの区分もいらないという考えも大切。目指すべき方向に向かってどう有機的に繋がり、連携し合うかが大切。）である。
- ・例えば、1次産業を観光と連携させたり、1.5～2次加工することで、ブランドづくりや雇用につなげ、加工品を商店街や民宿で販売するなど、相互に色々な連携が可能である。
- ・産業全体をトータルで考える必要があるが、現状ではこれらを総合的にプロデュースする人材がない。

8. 志津川ブランドの創出（特産品）

- ・豊富な自然、農水産物のブランド化ができないか。産業間の連携による各種産業の活性化や雇用創出にもつながる。
- ・外から来た人は南三陸町の「美味しい」「キレイ」資源が分かるが、そういったピカイチのものの良さに町民自身が気づいていない。例えば、仙台の人が南三陸に来て間近に「美味しい」と食べているのを見て、はじめてその価値が実感できる。この状況を打破する必要がある。

9. 防災対策

- ・自らの暮らしの安全確保のため、町民自らが支え合う仕組みづくり（例えば商店街と高齢者をつなげる、ボランティアの活用など）が大切である。
- ・津波の被害を次世代に伝える手段をどうしていくかということも大切である。
（○公営住宅の整備）

10. 住民参画のしくみ等

- ・従来の縦割りの分野区分では、限られた範囲でしか議論できない。これからのまちづくりは、分野の垣根を越えた相互の連携が必要であり、その意味において、今回のワーキングのような場で、より望ましいまちづくりのために、各方面の関係者がひとつのテーブルで議論をして目指すべき方向・施策を議論する場が必要ではない

か。

- 行政職員にも、住民と同じ土俵・目線でまちづくりに参加し汗を流してほしい。今回のワーキングのような場へ積極的に参加し、是非、行政マンの能力を活かしてほしい。
- 住民は今回のワーキングなどでアイデア出しが出来ても、それを継続できない。動きを継続させる部分に行政の力（支援・参加）が必要となる。
- 今回のワーキングのような動きが大きくなれば、行政を含め地域が一丸となって動かざるを得ない（「まちぐるみ運動」の展開）。一人では何もできないが、輪が広がれば原動力になる。